

別冊 課外授業 ようこそ先輩 NHK「課外授業 ようこそ先輩」制作グループ＋KTC 中央出版「編」

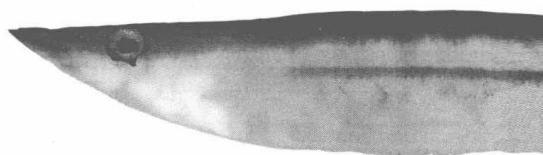
片岡鶴太郎

「女」
「男」
「一」
「所」
「縣」
「命」



女
「天」
「マ」
「に」
一
所
県
命

片岡鶴太郎



KATAOKA TSURUTARO

NHK「課外授業 ようこそ先輩」
制作グループ+KTC中央出版「編」

片岡鶴太郎 「好き」 に一所懸命 課外授業 ようこそ先輩 別冊

2002 年 7 月 27 日 初版第 1 刷発行

編 者 NHK「課外授業 ようこそ先輩」制作グループ
KTC 中央出版

発行人 前田哲次
発行所 KTC 中央出版
〒460-0008
名古屋市中区栄 1 丁目 22-16 ミナミビル
振替 00850-6-33318 TEL052-203-0555
〒163-0230
新宿区西新宿 2 丁目 6-1 新宿住友ビル 30 階
TEL03-3342-0550

編 集 (株) 風 人 社
東京都世田谷区代田 4-1-13-3A
〒155-0033 TEL 03-3325-3699
<http://www.fujinsha.co.jp/>

印 刷 図書印刷株式会社

© NHK 2002 Printed in Japan ISBN4-87758-249-5 C0095

(落丁・乱丁はお取り替えいたします)

東京都荒川区立ひぐらし小学校



授業の行われたひぐらし小学校は、ＪＲ・京成線「日暮里駅」のすぐ近くに位置する。営団地下鉄「西日暮里」にも近い。

一九八九（平成元）年に、鶴太郎さんの母校でもある真土まつち小学校と第四日暮里小学校が統合されて、新校設立された比較的新しい小学校である。

一九九一（平成三）年に、オープンスペースや全室空調設備を備える新しい校舎が落成した。

「元気で・仲よく・かしこい子」の育成を教育目標とし、地域の伝統風土に溶けこみ、地域に開かれた学校であることを校是こうしとしている。

〈番組名〉感じたままに正直に
NHK「課外授業 ようこそ先輩」制作グループ

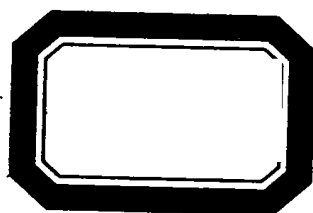
制作統括	土谷 雅幸 高瀬 雅之
プロデューサー	田嶋 敦
演出	正岡 裕之
構成	渡辺 渡
ナレーション	段田 安則
撮影	水野 宏重 新垣 直哉
音声	渡邊 勝重 宮澤 雅昭
技術	土山 裕美 白井 康之
音響効果	金田 智子
編集	山内 洋子
取材	小林 ひろ子 萩野谷 真理

共同制作 NHK
NHKエンタープライズ 21
東京ビデオセンター

本書は、上記NHK 総合テレビ放送番組とその取材ビデオをもとに再構成しました。

装幀／後藤葉子 (QUESTO)

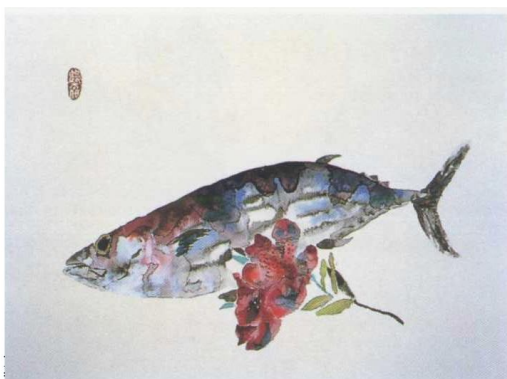
別冊 課外授業 ようこそ



国境なき医師団：貫戸朋子

- | | |
|-------|---------------|
| 山本寛斎 | ハロー・自己表現 |
| 小泉武夫 | 微生物が未来を救う |
| 丸山浩路 | クサさに賭けた男 |
| 吉原耕一郎 | チンパンジーにハマった！ |
| 岡村道雄 | やってみよう 縄文人生活 |
| 高城 剛 | まぜる!! マルチメディア |
| 綾戸智絵 | ジャズレッスン |
| 紙屋克子 | 看護の心そして技術 |
| ちばてつや | マンガをつくろう |
| 名嘉睦稔 | 版画・沖縄・島の色 |
| 小林恭二 | 五七五でいざ勝負 |
| 瀬名秀明 | 奇石博物館物語 |
| 須磨久善 | 心臓外科医 |
| 見城 徹 | 編集者 魂の戦士 |
| 榊 佳之 | 遺伝子 小学生講座 |
| 玄侑宗久 | ちょっとイイ人生の作り方 |
| 重松清 | 見よう、聞こう、書こう。 |

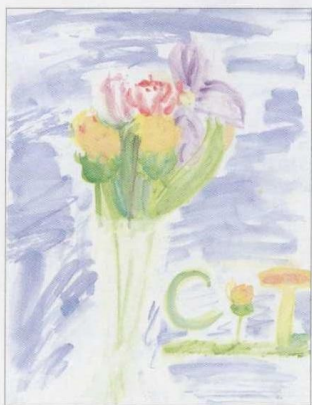
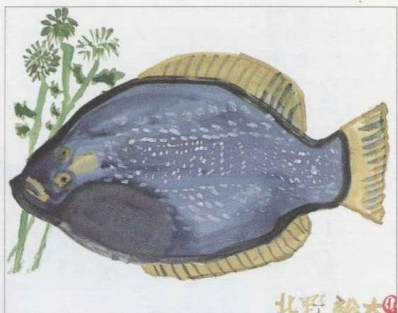
片岡鶴太郎さんの作品



鶴太郎さんが、授業で子どもたちに
見せた「カツオ」「ツバキ」「カブト
ムシ」の絵（本文44ページ参照）



鶴太郎さんが、授業で子どもたちの
前で描いたサンマの絵（本文71ペー
ジ参照）



子どもたちの作品

- 1段目右・左：北野君（79頁）
- 2段目右・左：諸岡さん（81頁）
- 3段目右・野口さんの右手の作品（87頁）
- 3段目左・田中さんの右手の作品（88頁）
- 4段目岩瀬君「描かれたがっているもの」（160頁）

片岡鶴太郎「好き」に一所懸命

もくじ



プロフィールにかえて

授業●

絵を描くことにたどりつくまで

ものまねから自分自身へ

鶴太郎さんの自分史と絵

授業●

描きたいものを選んで描こう

魚と花の中から選んで

利き手と逆の手で描いてみよう

「描いて」というものの声に耳を傾けよう

授業途中インタビュー

授業 ⑦

描かれたがつているものを描く

子どもたちに語りかけたものは何？
自分で選んだモチーフの絵の制作

119

授業 ④

聞こえた声に素直に描けましたか？

完成作品を前に感想を語ろう

157

授業を終えて

片岡鶴太郎 インタビュー

183

プロフィールにかえて

「好き」に一所懸命

ロケ先から帰った自宅で、フツと庭先に「赤」が見えた。それが胸の奥をキューッと捉えた。予期せぬ初めての不思議な出来事。人に聞くと、それはツバキの花だった。花の名前も知らなかった。四〇歳までツバキの赤を知らなかった。

これは、鶴太郎さんが初めて心の奥で絵と出会ったときのエピソードである（本書巻末のインタビューに詳しい）。このエピソードが伝える世界は、本書に記録する母校小学六年生への授業に流れる鶴太郎さんの思いに通じている。

鶴太郎さんの経歴・プロフィールには、一本しつかりとつながって流れている原点があることがわかる。ツバキの赤に心を捉えられること、そしてその「好き」に一所懸命であること。

本書は、このありのままの「好き」に一所懸命」の自分の姿を子どもたちに伝えた記録である。

片岡鶴太郎さんは、一九五四年十二月二日、東京都荒川区西日暮里にっぼりに生まれた。本名は荻野繁雄おぎの しげお。『鶴太郎絵日記』（毎日新聞社、一九九七年）の巻末年譜によると、父親が経営していた家具店が倒産して、生活は決して楽ではなかった。（以下、このプロフィールのデータはこの年譜、及び別掲既刊本からの転記、参考による）

一九六二年、荒川区立真土まつち小学校に入学。鶴太郎さんの母方の祖父は、若いころ羽子板はごいたの絵師だった。この祖父が屋台のお好み焼き屋をやって、鉄板に食紅しよくべにで絵を描いて子どもたちに売っていた。絵やものをつくったりすることの器用さは、その祖父の血を継いでいるのかもしれない、と後年に鶴太郎さんは知らされる。

小学校の図工の成績は良かったけれど、将来、本格的に絵に打ち込むことになるほどの関わりは、小学校時代にはなかった。東京下町の西日暮里には、当時、林や広場、草むらがあつて、そこにはいろんな鳥や昆虫がいた。季節の花々もたくさん咲いていた。そこでトノサマバッタを取ったり、野球に興じたりした少年時代だった。

一九六七年、小学校五年生のとき、「しろうと寄席よせ」（フジテレビ系テレビ番組）に出演し、動物の鳴き声などの声帯模写を演じた。このころから人を笑わせることが得意で、学校では人気者だった。

一九六七〜六八年にテレビ放送された「おもろい夫婦」で落語家・可笑^{かしよう}を演じた渥美清^{あつみきよし}さんに熱中したのが、真剣に芸能界に入りたいと思ったきっかけになった。のち、七一年〜七二年「おかしな夫婦」では、渥美さんは版画家棟方志功^{むなかたしこう}を演じ、このときの渥美清さんに心酔した体験は、鶴太郎さんの人生に大きく影響した。その後、鶴太郎さん自身も棟方志功を演じるめぐりあわせがあつて、しかも渥美さんは鶴太郎さんの舞台を見たうえで、二人は親交を持つことができた。

一九六八年、荒川区立第十中学校に入学。鶴太郎さんは、両親のあたたかい愛情に包まれた少年時代を過ごしたが、どちらかというと「悪ガキ」だったと語っている。学校から帰ると、かばんを放り投げて遊びに行き、夕方まで戻らなかった。

中学三年生のとき、「うちはお金がないんだから、私立高校なんて行けないよ。都立以外はだめだよ」と母親から、突如、言われた。芸能界に入りたいという希望はそろそろでに確かなものだった。が、「最終学歴が中卒じゃ、かつこうがつかないな」と悩んで、先生に相談したら、「おまえが都立に行けるわけではないだろう」と一笑に付された。それで夏休みに小学六年から中一、中二、中三と順にドリルを踏破していき、しだいに勉強への興味やわかることの喜びが強くなって、一二時間もゲーム感覚で勉強に没頭することもあった。クラスでビリから二番目だった成績が、学内で一〇番以内に入つて、先生からも「おまえはばかじゃない。がんばれ」と励まされ、一九七一年、都立竹台高校に合

格、入学した。

——芸人になりたいという思いがこれほど強くなかったら、とてもあそこまで勉強することはできなかったと思います。好きなものを持つていたということは、ほんとうによかったですね。

自分の子どもたちにも、好きなものを持つてほしいと思っています。でも、よく考えてみると、好きなものってなんでしょう。持とうと思っても、なかなか持てるものではないような気がしています。好きなものとは、意識して頭で決めることなく、フツと出てくるもののようです。理屈ではないんですね。

高校では演劇部に入った。イヨネスコ、ベケット、別役実の芝居べつやくみのるの主役も演じた。

一九七五年、高校卒業後、芸能界に入るべく、清川虹子さんきよかわにじこ、松村達雄さんまつむらたけおに弟子入りを申し込んだが断られ、芸能界デビューの高いハードルを思い知らされた。父にないしよにして行つた弟子入り申し込みの門前の座り込みも、明け方に交番に泊めてもらおうとして、全部ばれた。翌朝父がいっしょ一升瓶を持って交番に来て、トボトボと父のあとをついて帰つた。

それで、ものまね芸人になりたいとの思いを連綿と綴つた手紙を片岡鶴八師匠に送ってみると、幸

運にも会ってもらえることになった。こうして、かばん持ちからの芸人生活がスタートした。一八歳のときだった。

鶴八師匠は、歌舞伎の名台詞などを口伝えによく教えてくれたけれど、芸のほかにも魚の食べ方、ビールの注ぎ方という、芸人のマナーの教えにはことのほか厳しいものがあつた。

——「おい、きょうはそばを食べにいくぞ」

師匠はそういつて、わざわざ僕をそば屋に連れていつてくれました。そばを注文して、「食べてごらん」というので、今まで自分が食べていたように食べました。すると、師匠は微笑みながら、こういいました。

「そう、そうやつて食べるのがいちばんうまいよな。でもな、江戸っ子というのはやせがまんなんだよ。江戸っ子はな、そばを全部つゆにつけちやあ野暮になる。まして、芸人というのは人さまの前に立つ商売だ。食べるものもきれいに食べなければならぬ。いいか、そばはあんまり多く持たないで、スーッとこう持つてきて、それでつゆを三分の一くらいつけて、ズーッと吸って食べるんだ」

僕はいわれたとおりにやつてみました。そばをつゆに三分の一くらいつけてズーッと吸って食